事例紹介

外国人従業員と共に地域の伝統を活かした町おこし

株式会社桝一市村酒造場 代表取締役
市村 次夫

混在性あふれるまち、小布施

長野県の小布施町からやってまいりました市村と申します。日本酒の酒造メーカーと、それから小布施は栗が特産ですから、栗の菓子を作って販売するというような商売をやっております。

今から17、8年ほど前に、セーラ・マリ・カミングスというアメリカ人がやってまいりまして、「４年後に長野オリンピックがあるそうだけれども、なんらかの形でかかわりたい。ついてはこちらに４、５年世話になりたい」というようなことを言いました。

彼女が言うには、その１年ほど前に長野に来て、長野オリンピック組織委員会に籍を置いて、長野オリンピックの前のリレハンメルオリンピックに長野から見学団が行く方々のお世話をしていた。小布施に行きたかったのは、彼女は数年前の学生時代に関西外国語大学に交換留学生で１年いて、それから１年長野市に住んでみて、そして小布施なるところがあることを知って、その小布施のたたずまいというのは彼女がアメリカで思い描いた日本そのものだと。だから、ここで働きたいということでありまして、そういう意味では景観とか建築というのはまさにコミュニケーションツールだなと、そんなふうなことを感じたわけであります。といいますのは、小布施では今から30年ぐらい前から、町並み修景事業を行政も含めてやっていた。景観を整えていく、単に古い建物を残してということではなくて、積極的に古い建物を、場所を移動してもいいから使っていく。それから、新しい建物は、古いものと調和したものにしていく。それを彼女が見て、ここで是非ということになったわけです。

この町並み修景事業では、もちろん建築家は入れましたけれども、いわゆる都市計画の専門家とか、そういう方々は排除いたしました。なぜかというと、あまりにもヨーロッパのゾーニングを中心にした都市計画がはびこっておりましたので、我々はアンチテーゼを打ち上げたかった。生活するとか、生産するとか、あるいは観光客を迎え入れるとか、そういうものをきれいにゾーン分けせずに、１か所で全部引き受ける。我々がやり始めて10年後ぐらいに、ようやく日本の都市工学の中でも混在性という便利な言葉ができてまいりました。実は、混在性という言葉ができるよりも早くやっていたということであります。

あらためてこの小布施の町を紹介いたしますと、面積が４㎞四方にも満たないような小さな町ですが、自然の川とか山で隣村との結界がはっきりしているところです。ですから、どんなに日本国政府が騒いでも合併する気はさらさらない。というようなことで、現在この面積、河川敷も含めて19㎞^{2}、河川敷を除くと14㎞^{2}という小さな面積は、長野県に80市町村があるわけですけれども、断トツで一番狭いことを自慢にしているという変な町であります。

この町は昔から名物がありまして、岩松院というお寺の本堂に葛飾北斎の描いた鳳凰の天井絵がある。

この天井絵だけじゃなくて、例えば祭り屋台の天井絵、これは大きさ１m20㎝角ぐらいの、そんなに大きいものじゃありませんけれども、しかし海外の専門家に言わせると北斎傑作中の傑作。後で申し上げますけれども、

町並み修景事業シンボル「栗の小径」

10年ちょっと前に世界中の北斎の研究者を小布施に招いたときに、ひそかに私がいろいろ聞いてみると、やっぱり世界の北斎の作品ベスト３の一つに確実に入るという代物です。ちなみに、日本国の評価は国宝でも重要文化財でもなんでもないと、こういうことであります。

“猛烈な台風娘”大活躍！

先ほどのセーラ・マリ・カミングスに話を戻したいと思うんですけれども、彼女の存在が、言ってみればオリンピックの終わった後の遺産の一つなのかなと、そんな気がしているわけです。長野オリンピックでは、彼女は当時、イギリスチームのお世話係をしていました。彼女はそのころから徐々に頭角を現しまして、京都の傘問屋さんなんかを駆けずり回って、オリンピックカラーの蛇の目傘をつくりました。そのときも苦労したのですけれども、いまやこんなクオリティーの高い傘は日本ではできません。

オリンピックが終わりまして、1998年の秋ですけれども、次に彼女が仕掛けたのは国際北斎会議というようなものです。どういうものかというと、それまで1990年と1994年に、イタリアのベニスで世界中の北斎の研究者、あるいは北斎に興味のある研究者、それから画商、そういう方々が集まって学術会議をやるというようなことを２回開いています。彼女は、３回目もするとすれば98年、オリンピックの後だなというふうに踏んで、このイタリアのベニス大学とさらに交渉いたしまして、さらにやっぱりこういう世界でも世界の大ボスというのが何人かいるんですけども、大ボスたちを口説いて回って、私とか、あるいは当時の小布施町長などが、よもやそんなことはないだろうと思っていたのを成立させる運びに持っていきました。内容は３日間の会議で、論文の発表という地味なものでありましたけれども、それとは別建てで、町としてはこれにあわせて北斎に関するイベントを、北斎フェスティバルと銘打ちましてやりました。ちょっと別なところでは、『開運！　なんでも鑑定団』（テレビ東京）を呼んできて、北斎の作品を紹介してもらったと。

それからもう一つ大きいのは、新幹線がオリンピックのためにできた。やはり小布施は新幹線がなかったら東京からは遠いですけれども、この新幹線が来たからやりやすい。それからもう一つ彼女が踏んだのは通訳ボランティアです。オリンピックのときには地方都市にしては異常なぐらい長野には通訳ボランティアが増えているはずだ。そうすると、小布施のような小さな町も長野市とか一円に輪を広げれば、通訳ボランティアがたくさんいる、こんなチャンスはないぞと。加えて、北斎没後150年目の年というようなことで、これらを全部組み合わせてこのイベントを実際にやった。これを見て我々はたいへん驚きまして、本当にほら吹きじゃなくてやるんだということで、当時私どもの家業としての酒屋がある面で重荷になっていたものですから、これは彼女に思い切って任せたほうがおもしろいものができるかなということで任せました。

酒蔵の一部を和食レストランに改装したときの話ですが、最初私が計画したのは、そんなにいじらないで、お金をかけないで、総投

資額二千数百万円でおさまるようなことを考えていました。彼女は半年ぐらいにわたって猛反対しました。なぜ反対したのか。最初のうちは趣味の問題だろうと、そのぐらいに思っていたのですけれども、よくよく耳を傾けてみたら、このへんがある面では、私も含めて日本人が陥りやすいところだったのかと思うのですが、いったいなんのためにこのレストランをやるのか。なんのためにって、自分ちの酒を売るため。じゃあ、その酒はどういう酒にしようとしてるの。いや、これは量を少なくするからにはやっぱり付加価値をつけて高い酒を売りたいと。そうすると、高い酒を売るのに、それを飲んでもらう一番の場所としてのレストランが安い普請で、料理人置かないでレトルトを使ったような料理で済むのかと、矛盾するじゃないかと、これをさかんに言ったんですね。私は、どちらかというとどの程度ならできる、どうやって資金繰りをつける、ハウツーだけを考えていた。でも、彼女はなんのためにやるんだということを考えていた。ここではっと気がつかされまして、やめたと。私のプランを捨てて、じゃあどういうふうにやるんだと言ったら、彼女が日本へ来て一番気に入った建物は東京の新宿にあるパークハイアット東京である。あれをデザインしたジョン・モーフォードという、アメリカ人であるけれども香港で事務所を構えている男にそれをつくってもらうということになりまして、もうやけくそです。で、つくりました。格好いいんです。しかし、聞いてください、皆さん。その実際にかかったお金は、当初考えた2,500万円から10倍の２億5,000万円かかりました。継続と思っちゃいけない、新たにこういう商売を始めたんだと、そういうことを考える以外ないなあということでありました。しかし、その考えというのはたいへんに勉強になったわけでありました。

このときにちょうど雑誌が取材に来まして、そのときに私が「精神的にも経済的にも被害を受けている。台風に遭ったようなものだ」というような話をしたところから活字になったときに見出しが「台風娘」になったんですね。彼女に台風娘というニックネームがついた由縁であります。

それだけにとどまらず、今度は酒屋がみんなホーローのタンクやステンレスになっちゃったので、もう一度木桶を復活しろと、どこかから桶職人を探してきて、木桶をつくっちゃったんですよ。2000年のミレニアムにあわせて、うちの蔵でいえば50年ぶり、それから全国的にいっても20年ぶりぐらいの酒の木桶仕込みの復活です。この酒をつくっちゃいまして、また一ひねりやるんですね。酒の名前を「白金」にするんだと、それを復活するんだと。そしてボトルを本当は白金でつくるべきだけど、白金でつくると当時のお金で150万円ぐらいかかるんですね。そこはステンレスで我慢するからっていうんで、ステンレスボトルが誕生しました。

ちなみに、これはあまりにも格好いいものですから、３年ぐらい前に『KENZO POWER』という香水のボトルにデザインを使わせてくれといってきたので、まあ化粧品と酒だから競合しないだろうということでオーケーしました。あっちは化粧品なので、もっと小さいボトルですけど、そっちもすごいなと思ったのは、どう見ても金属なのに実は金属じゃない。ガラスで出来ている。これは日本の技術じゃなくてフランスの技術なんですけども、本当に寸分たがわず金属に見える、そういうボトルであります。そういう後日談もあるようなデザインになりました。

さらに、桶屋さんを絶やしちゃいけないということで、全国の酒屋はもちろんですけれども、みそ屋さん、しょうゆ屋さん、それから漬物屋さん、そうした方々に声をかけて、「いまさらおけを考える会」というのを東京で行いました。500人ぐらい集まりました。いまや酒屋だけでいっても、木桶で仕込む酒を一部復活した酒屋が80社を超えましたので、そういう意味では一定の、私らの会社だけじゃな

くて、日本全体でも意味があったかなと、そんな気がするわけであります。

小さな町だからこそ

それからさらに、外の考え、外の風ということで、今から10年ちょっと前に「小布施ッション」というイベントをやりまして、あらゆるジャンルの彼女が思いついた人間に、毎月来ていただいて、話をしていただいて、参加者全員でパーティーをやってというイベントです。もう11年目に入りました。ちなみに、小布施も含めた地元がだいたい４割ぐらい、あとの６割は県外、もちろん沖縄、北海道、そういうようなところからお客さんがおいでになって、そしてそのオーディエンス同士でいろんな話や何かが進んで、そういう中から見合い結婚しましたとかいろいろそんな話もあるわけであります。

そのぐらいはまだたいしたイベントじゃないんで、もっと驚いたのはマラソンです。題して『小布施見にマラソン』。平成23年は９回目ですけども、１回目800人だったのが、３回ぐらい前から8,000人出る人気大会になりました。一番驚いたのは、行政の補助金なしでやる。かつ大きいスポンサーもつけない、冠イベントにしない、でやっている。これはあまり記録達成には向かない。小布施の町のいろんな田舎道や住宅街とかそういうところを走るコースなものですから。しかし女性に人気ということで、女性だけの人気をとると全国ナンバーワン、東京マラソンを抑えて、男女合わせると６位か７位の人気マラソン大会です。こういうコースなどをつくりまして、そして、これはある面じゃあ象徴的な場面ですけども、このマラソンのボランティアスタッフは地元の小・中学生総出です。これはもう都市部じゃあちょっと考えられないところかと思います。

最後の話に入りたいと思いますけれども、私どもの敷地内に江戸時代初期にできた用水が流れています。学校で習う歴史がだめだと

空から見た小布施堂界隈

思うのは、何か江戸時代のまちは大名がつくったとみんな思っている。それは大きな大名の城下町だけで、小布施のようなどうでもいい全国津々浦々にある町というのは、みんな民間がつくったんですね。勧進元がいて。そのときにこの用水網をつくっているわけですよ。そして、セーラ・マリ・カミングスが発見したのは、これが日本のパブリックとプライベートのうまい折り合いなのだと。つまり、この用水をきれいに流すという点では公であり、しかしこの間を、物を洗う場所とか、あるいは池にするとか、そういう護岸とかを何に使うかはまったく個人の自由に任せていて、日本ほど公と私がうまく整合しているところはないんだよ、というのは彼女がこの用水を見て発見したことです。そういう意味で、彼女、それからもう一人、もうちょっと若い男性のアメリカ人が社員としているんですけれども、彼らを見ていると、彼らは日本人には無い視点を持っているなと思うことが多々あります。

略歴：
市村 次夫（いちむら・つぎお）
1948年長野県生まれ。1971年慶應義塾大学法学部卒業。同年信越化学工業株式会社に入社。1980年に同社を退社し、（株）小布施堂代表取締役、（株）桝一市村酒造場代表取締役に就任。財団法人北斎館理事。
1994年にアメリカ人のセーラ・マリ・カミングス氏を雇用し、セーラ氏と共に様々なジャンルの方を講師として招く「小布施ッション」や観光客に町全体を巡ってもらうことを目的として『小布施見にマラソン』等小布施町を拠点に、地域資源を活かした町おこしのための事業に取り組んでいる。